

博士論文の要約

氏 名： 齊英

博士論文題目： 清代内モンゴル・ハラチン地域の社会構造に関する研究

問題の所在：

本論文は、清代モンゴルのザサグ旗 (jasay qosiyu) ¹社会構造を解明することを通じて、清朝のモンゴル統治の性格を考察しようとするものである。

清代モンゴルとは、モンゴルが清朝の統治下にあった 17 世紀から 20 世紀初頭の時期を指す。清代のモンゴルは、主として盟旗制度と呼ばれる統治システムにより統治されていた。ザサグ旗とは、盟旗制度下においてザサグを旗長とした行政組織である。それゆえ、清代モンゴルのザサグ旗の社会構造を解明することは、ひとえにモンゴル社会の研究だけでなく、清朝のモンゴル統治の性格を考える上でも重要な意義がある。

この研究において、筆者は主にザサグ旗におけるソム (sumu、佐領) の性格及びソムと貴族²との関係に注目したい。なぜならば、ソムは清朝がモンゴル社会に導入した組織なので、清朝統治下のモンゴル社会を研究するには、まずソムそのものの性格を解明することが何よりも重要だと思われるからである。また清朝はモンゴル既存の支配氏族に自らの宗室と同等の爵位と、それに応じた随丁 (qamjilay-a) を分与する等の特権的地位を認めて、貴族として優遇した。それゆえ、これらモンゴル貴族とソム組織との間にどのような関係があったのかも、ザサグ旗社会構造の解明において重要な課題となる。

ところが、清朝のモンゴル法制を記した『大清会典』『大清会典事例』『蒙古律例』『理藩院則例』等の清朝編纂の法制史料には、ソムは 150 名の箭丁 (quyay) をもって構成され、旗・ソム官員によって管理されたという以外全く規定がない。従って、清代モンゴルのザサグ旗社会に関する従来の理解は、基本的にこれら法制史料中の規定から抽出された次のようなものであった³。清朝

¹ ザサグ旗 (jasay qosiyu) とは、ザサグ (jasay) と呼ばれる旗長が置かれた旗を指し、盟旗制度における基本的な行政単位である。ザサグは旗内の特定の氏族に属する貴族から任命される。このような幾つかの旗によって盟 (ciyulyan) が組織され、盟長・副盟長等が置かれていた。彼らは「盟内における旗同士の関係調整や、理藩院からの命令伝達、上呈された諸案件の審理と理藩院への呈報等の事務をしていた」(岡洋樹 [2007]『清代モンゴル盟旗制度の研究』東京、東方書店、7 頁)。このような清朝のモンゴル統治制度は盟旗制度と呼ばれ、これに属するザサグ旗は外藩モンゴルと総称された。

² 清代の外藩モンゴルにおいて、本稿が対象とする内モンゴル・ハラチン地域 (ハラチン三旗 [ハラチン右翼旗、ハラチン左翼旗、ハラチン中旗]) とトゥメト左翼旗では貴族身分の者が王公タブナンと呼ばれ、ほかの全ての旗では王公タイジと呼ばれていた。本稿では、それを合わせて王公タイジ・タブナン、あるいは貴族と総称するが、場合によって、王公タブナン、王公タイジ、あるいは王公、タイジ、タブナンとそれぞれに呼ぶことにする。

³ 主として、内蒙古自治区蒙古語文歴史研究所蒙古族簡史編写組 (1977)『蒙古族簡史』呼和浩特、内蒙古人民出版社；趙雲田 (1989)『清代蒙古政教制度』北京、中華書局；盧明輝 (1990)『清代蒙古史』天津、天津古籍出版社；烏雲畢力格、成崇徳、張永江 (2002)『蒙古民族通史』(第四卷) 呼和浩特、内蒙古大学出版社；趙之恒、張建軍、郭永勝、于志勇 (2007)『内蒙古通史』(3) 呼和浩特、内蒙古大学出版社；札奇斯欽 (1980)「近代蒙古之地方政治制度」『蒙古史論叢』(下) 台北、学海出版社、1061-1086；中島竊 (1916)『蒙古通志』東京、民友社；矢

はモンゴル既存の支配氏族達に満洲宗室と同等の爵位とそれに応じた随丁を与えて貴族とした一方、その族ごとに族長 (törül-ün daruy-a) 一名を設置して、それを管轄させた。旗長たるザサグ (jasay) は旗内の特定の貴族から選ばれ、その世襲が認められた。ザサグの補佐官として、協理 (tusalayči) が置かれて、彼らも貴族身分の者から任命された。ザサグと協理以外に、印務処官員として、管旗章京 (jakiruyči janggi) ・梅倫章京 (meyiren janggi) ・扎蘭章京 (jalan janggi) などが設置された。一方でソムは、満洲の八旗制度に準えた、150 名の箭丁をもって一単位とされた組織である。ソムには、ソム章京 (sumun janggi、佐領) ・驍騎校 (kündü, orulan kögegči) ・領催 (boşuyu, bay-a kögegči) が設置されたほか、また箭丁十戸ごとに十戸長 (arban ger-ün daruy-a、什長) が置かれた。また王公達の属下には、彼らの爵位に応じて王公府官員が設置された。

しかし以上から、ザサグ旗の社会構造が明らかになるとは到底言いがたい。かつて、清代のモンゴル社会は全く清朝が導入した旗・ソムの組織によって再編成されたかのような理解がなされていた。しかし、そもそも法制史料の規定では、新たに設置されたソムの組織構成さえ不明確であり、またソムと貴族との関係についても全く規定が存在しない。そのため、そこから抽出された理解をもって、ザサグ旗の社会構造を説明することには重大な欠陥があると言わざるを得ない。

これに対し、清朝法制史料だけでなく、調査報告あるいは公文書史料をも活用した先行研究がある。例えば、田村英男 (1942) は、氏自ら内モンゴル西部で行った調査をもとに、内モンゴル・イヘ・ジョー盟準噶爾旗 (オルドス左翼前旗) の全 42 ソムの内、ザサグ王の属下に 5 ソム (内ソム) が、他のタイジの属下には 37 ソム (外ソム) があったとする⁴。また田山茂 (1954) は、「旗を構成するソムにも二つの系統がある」として、上記田村英男氏による内ソムと外ソムの例を引用している⁵。彼等の研究は、ソムが王公タイジの属下にあったと指摘した点で重要な価値がある。しかし、ソムを属下とした王公タイジとソムとの関係——すなわち、ソムの組織構成と貴族との具体的な関係が論じられていない。一方、法制史料とハルハ・モンゴルの旗の公文書史料を用いた Sh.ナツァグドルジ氏の一連の研究も注目される⁶。氏は、ハルハ・モンゴルの事例から、王公タイジと随丁との統属関係を認めているが、ソムに編成された箭丁を満洲皇帝のアルバト (albatu、アルバ [alba、貢租賦役] 負担者) となったとして、閑散王公タイジとの統属関係を否定している。つまり、ソムは閑散王公タイジの管轄から断たれた形になったと理解されており、上記田村英男らの知見と大きく異なっている。もしソム箭丁と王公タイジとの統属関係が断たれ

野仁一 (1925) 『近代蒙古史研究』東京、弘文堂書房；Ц.Сономдагва (1961) : *Манжийн захиргаанд байсан үеийн ар монголын засаг захиргааны зохион байгуулалт(1691-1911)*. Улаанбаатар.などが挙げられる。

⁴ 田村英男 (1942) 「蒙古社会の構成的基層単位としてのソム—伊克昭盟準噶爾旗河套地 (河北) を中心として」『満鉄調査月報』第 22 巻第 2 号、64-114 頁。アルタンオルギル氏によって刊行された『kökeqota-yin teiken mongyul surbulji bičig』(1) には、イヘ・ジョー盟ウーシン旗 (オルドス右翼前旗) のソムの比丁冊が収録されており、そこにソムを属下とするタイジが記されている。altanorgil(1987): kökeqota-yin teiken mongyul surbulji bičig.(1). kökeqota. 257-261niyur.

⁵ 田山茂 (1954) 『清代に於ける蒙古の社会制度』東京、文京書院、143 頁。

⁶ Ш.Нацагдорж(1963): *Манжийн эрхшээлд байсан үеийн халхын хураангуй түүх(1691-1911)*. Улаанбаатар.同(1972): *Сум, хамжлага, шавь ард*. Улаанбаатар.同(1978): *Монголын феодализмын үндсэн замнал*. Улаанбаатар.

たとすれば、清朝はソムを導入することで、モンゴル既存の支配氏族とその属民であったアルバートの統属関係を大きく変えたことになる⁷。しかし、このような統属関係こそはモンゴル既存の基本社会関係であったのであり、清朝はあえてこれを改めることによってモンゴルを統治したと考えるのは無理がある。

さらに、近年盟旗レベルの公文書史料などを用い、ザサグ旗社会に関する従来の理解を具体的な事例から再検討する試みが為されつつある⁸。これらの研究は、主にハルハ・セツェン・ハン部中末旗を事例として、清朝法制史料に規定のないオトグ・バグ集団の存在に注目して進められた岡洋樹氏の研究に始まる。これによると、清代のハルハ・モンゴル社会におけるオトグ・バグとは、王公タイジの血統分枝に基づいた集団であることと、それが八旗の組織原理を導入したソムと併存しながら機能していたことを明らかにしたものである。岡洋樹氏は、ソムとオトグ・バグが組織原理の異なる組織であったとしながら、ソム箭丁は日常生活では王公タイジの属下にあり、旗内社会において実際に機能していたのはオトグ・バグであったと主張している。一方ソムについては、「満洲がモンゴル社会に打ち込んだ満洲的社会編成原理に基づく楔だったと言えるかもしれない」としているが、ソムが楔たり得る性格や機能については明確に論じていない⁹。これに対し、ハルハ・トシェート・ハン部左翼後旗を分析した中村篤志氏は、王公タイジの血統分枝集団バグの存在を確認しつつも、ソムは独立のアルバ負担単位として機能していたことを論じている¹⁰。またハルハ・セツェン・ハン部中前旗を事例とした堀内香里氏は、同旗でもオトグとソムが併存しながら、両者とも旗印務処の管轄下で機能していたとする¹¹。これらの研究は、ハルハ・モンゴルの異なる旗を事例として、清朝が導入したソム組織とは別に、モンゴル王族の血統分枝に基づいた組織オトグ・バグの存在とその機能を解明しつつあり、この点にこそ重要な価値がある。しかし、筆者が提起した問題、すなわち清朝が導入したソム組織の性格と、それがモンゴルの王公タイジ・タブナンとどのような関係を持つのかについては、やはり論じられていない。

本研究が対象とする内モンゴル・ハラチンの公文書史料を読んでいくと、同地域にはソム以外に、先行研究に見られるオトグ・バグのような組織は全く現れないのである。これは清代のモンゴル社会には、清朝によるソム組織とオトグ・バグのような組織は必ずしも併存していたとは限らないことを意味する。もしそうであれば、ソムを単なる法制史料中の規定のみをもって理解してよいのかという疑問が生じる。ところが、上述した諸先行研究では、いずれもソム組織の性格

⁷ これについて、既に岡洋樹氏によって指摘されたことがある。岡洋樹（2007）『清代モンゴル盟旗制度の研究』東京、東方書店、109頁。

⁸ 岡洋樹 2007 と、中村篤志（2003）「清代モンゴルの比丁冊に見るタイジの血統分枝集団」『集刊東洋学』第90号、110-90頁；同（2005）「清代モンゴル旗社会におけるタイジの血統分枝と属民所有」『山形大学歴史・地理・人類学論集』第6号、27-45頁；同（2011）「清朝治下モンゴル社会におけるソムをめぐる一ハルハ・トシェート・ハン部左翼後旗を事例として」『東洋学報』第93巻、1-25頁。また堀内香里（2013）「清代中期以降におけるハルハ・モンゴル旗内の社会関係調整機能について—セツェン汗部中前旗の「離脱」案件を通して—」『内陸アジア史研究』28号、75-100頁等。

⁹ 岡洋樹前掲書 2007。

¹⁰ 中村篤志前掲論文 2003、2005、2011。

¹¹ 堀内香里前掲論文 2013。

を十分に分析しておらず、ほとんどが法制史料による理解にとどまっている。言い換えれば、ソムの組織構成と貴族との関係性を過小に評価しているのである。

一方、本研究が対象とする内モンゴル・ハラチン地域を含む東部内モンゴルの社会変遷や農耕村落化を文書史料を用いて分析したものとして、白玉双氏と珠颯氏の研究がある¹²。両氏は、18世紀から20世紀初頭の期間を扱って、漢人移民の入植に伴ってハラチン地域およびそれを含む東部内モンゴル社会は農耕社会へと変わっていったことを中心に論じている。その中で、いずれも王公タブナンとソム箭丁との統属関係の存在に言及しているものの、ソム箭丁を属下とする王公タブナンの血統上の関係、ソムと王公タブナンとの関係を具体的に論じたわけではない。

そこで本研究では、内モンゴル・ハラチン地域を事例として、ソムの性格と王公タブナンとの関係に注目することによって、同地域における社会構造の実態を明らかにしたい。なお、内モンゴル・ハラチン地域を対象とするのは、次のような理由によるものである。まずは、ハラチンの貴族は上述の先行研究が対象とするハルハのタイジとは異なり、オリヤンハイ氏族のタブナンであったからである。彼らは、北元時代にオリヤンハ三衛の一つ朮顔衛に当たり、16世紀半ば頃に属民とともにモンゴル右翼三万戸の一つであるユンシェブ・ハラチンの支配下に入った¹³。つまりユンシェブ・ハラチンのタイジの属下となったのである。しかしその後、清朝に服属したハラチンは、ボルジギン氏のタイジが八旗に編入され、元来の首長であったタブナンには、王公タブナンの爵位が与えられて、ボルジギン氏タイジと同様の貴族とされた。それゆえ、清朝のモンゴル統治性格を理解するには、タブナンを貴族とするハラチン地域の社会構造を、タイジを貴族とする先行研究との比較研究が求められる。また、清代のハラチン地域は定住社会であり、先行研究が対象とするハルハの遊牧社会とは生産や居住形態が異なっている。これは清代のハラチン地域は、内モンゴルの東南部に位置し、早い時期から内地漢人移民が入植した地域であることと関わりがある。漢人移民の入植によって、ハラチン・モンゴル人達は遊牧生活から農耕生活へと変わり、次第に定住村落社会を形成したのである。このような生活様式を異にする地域における清朝統治の性格も、検討する必要がある。ちなみに、清代のハラチンの文書史料が多く残されていることも、この地域が研究対象として有望であることを示している。

研究史料

本研究で用いる史料は、清朝編纂の法制史料（『大清会典・則例』『大清会典事例』『蒙古律例』『理藩院則例』）以外に、主として内蒙古自治区档案馆所蔵ハラチン三旗の公文書史料と遼寧省ハラチン左翼蒙古族自治县档案馆所蔵ハラチン左翼旗の公文書史料である。そのうち、内モンゴル自治区档案馆所蔵のハラチン三旗文書は、それぞれハラチン中旗 42402 卷（全宗号 504）、ハラチン左翼旗 12621 卷（全宗号 503）、ハラチン右翼旗 576 卷（全宗号 505）で、遼寧省ハラチン左翼蒙古族自治县档案馆所蔵のハラチン左翼旗文書は約 600 卷（全宗号 200）である。本稿では、

¹² 白玉双（2007）『十八至二十世紀初東部内蒙古社会変遷研究—以喀喇沁地区旗制与旗民社会为中心』内蒙古大学博士学位論文；珠颯（2009）『18・20世紀初東部蒙古農耕村落化研究』呼和浩特、内蒙古人民出版社。

¹³ 烏雲畢力格（2005）『喀喇沁万戸研究』呼和浩特、内蒙古人民出版社、36・52 頁。

以上の膨大な文書史料中から以下のような種類の文書を用いる。さて、文書の種類は、档案馆によって分類されたものでなく、何れも筆者が共通点のある文書を見つけて整理したものである。

①タブナン系図。本稿で用いるタブナン系図は、すでに出版された『喀喇沁左翼旗烏梁海氏家譜』¹⁴と『烏梁海部落史』¹⁵に収録されたハラチン三旗のタブナン系図のほか、内モンゴル自治区档案馆所蔵の道光 15（1835）年のハラチン左翼旗の各族長タブナンによって作成・報告された系図である。

②タブナン名冊と、それに関する旗衙門の命令文。本稿で用いるタブナンの名冊には、出家したタブナン名冊や爵位を継承するタブナン名冊、満洲皇帝にアルバを提供するタブナン名冊などがある。いずれも族長タブナンらが、旗衙門の命令で各々の管轄下タブナンのうちの、出家者・爵位継承者・皇帝にアルバを提供する者の名前・年齢などを旗衙門へ報告したものと、旗衙門がそれをまとめて盟長処、あるいは理藩院に報告したものである。一方、タブナン名冊に関する旗衙門の命令文とは、上述したタブナンの名冊を報告させるために、旗衙門が各族長タブナン宛てに命じた文書である。

③治安報告冊。本稿で用いる治安報告冊は、アイル・ブereg（ayil/bülüg）を単位とする治安報告冊と、太平社（tai ping she）を単位とする治安報告冊の二種類である。前者は、ハラチン地域の定住村落であるアイル・ブeregの役人達（官員、閑散官員、ダルガ、長老など）が、旗衙門の命令に従って、自らのアイル・ブereg内における治安状況を調べ報告した档冊である。後者は、同地域における治安維持組織太平社（近隣の複数のアイル・ブeregから構成される）の役人達によって、各々の管轄下の治安状況を旗衙門或いは旗衙門に派遣された使者らに報告した文書である。

④訴訟文書。本稿で用いる訴訟文書は、主にタブナン同士の間で起きた訴訟、タブナンとアルバトの間で起きた訴訟、アルバト同士の間で起きた訴訟の三つの種類に分けることができる。訴訟の内容としては、アルバトやアルバをめぐる訴訟、財産分配や土地・地租・借金をめぐる訴訟など多様である。

⑤旗内で定められた規定。主に二種類がある。一つは、旗衙門での事案処理に関する諸規定で、協理タブナンと印務処官員達が協議した提案がザサグの許可を得ることで実施されたものである。もう一つは、現地での案件処理やそれに関する旗衙門の命令文書である。

⑥比丁冊。本稿では、ハラチン中旗の乾隆 8（1743）年から同治 10（1871）年の間の 23 年分の比丁冊 23 件と、同旗道光 27（1847）年の各ソム（48 ソム）の比丁冊 48 件を用いる。旗の比丁冊とは、モンゴル各旗が四年に一度旗内の各身分の成人男子を調べ、これを档冊に登録して理藩院に報告した名簿である。これに対し、ソムの比丁冊は、旗の比丁冊を作成するために、旗内における各ソムを単位に各身分の成人男子を記録した名簿である。旗の比丁冊の作成や報告については、清朝が定めた規定が存在するものの、ソムの比丁冊に関しては何ら規定が存在しない。

⑦ソムのアルバ報告冊と、それを作成・報告させるための旗衙門の命令文書。ソムのアルバ報

¹⁴ 楊豊陌（2003）『喀喇沁左翼旗烏梁海氏家譜』瀋陽、遼寧民族出版社。

¹⁵ 烏成蔭（2009）『烏梁海部落史』呼和浩特、内蒙古文化出版社。

告冊とは、ソム官員達（ソム章京・驍騎校）が管轄下ソムのアルバトから徴収・納入されたアルバを年に一度旗衙門へ報告した档冊である。本稿では、筆者が入手した乾隆から光緒期のハラチン中旗の 20 件の档冊を取り上げて考察する。一方、ソムのアルバ報告冊を作成・報告させるための旗衙門の命令文書とは、旗衙門の各扎蘭章京宛の命令文書である。これによると、ソムのアルバ報告冊は毎年三月に報告する定めであったが、それが必ずしもその通りに行われていたとは限らなかった。すなわち、ソム官員によって、提出が遅れるか或いは提出しないこともあったようである。その際に旗衙門が各扎蘭章京達に提出を督促したのがこれらの文書である。同文書に述べられた記述によると、ソムのアルバ報告冊を提出させる目的は、旗衙門がアルバ徴収に関わった紛争・訴訟を解決するために、証書として残すことにあった。

⑧タブナンへの随丁分与に関する文書。これは、タブナン達が爵位を授与・継承した後、それに応じた随丁を分与されていないとして旗衙門に訴え報告した文書と、それを処理した旗衙門の文書である。この文書には、タブナンへの随丁分与に関する詳しい情報が記されている。

⑨アルバ徴収に関するザサグの命令文書。これは、咸豊 2 (1852) 年ハラチン中旗ザサグ delger が旗内のタブナンやアルバト全員に命じた文書である。この文書には、タブナン達の自分の所属アルバトから徴収するアルバが詳しく規定されており、計 20 個条の規定がある。本稿では、主にソム箭丁と随丁に関する二条を用いる。

⑩戸口冊と戸口農地冊。これは、旗民の戸口や農地がアイル・ブREGを単位として調べ報告されたものである。そこに、各アイル・ブREGに住む者の戸名・人口、或いはそれに農地面積をも加えて記されている。

⑪官員の名簿冊。本稿では、主に旗内の閑散官員の名簿冊と全官員の名簿冊を用いる。前者は、旗内における閑散官員のみを記録した名簿冊であるが、そこに彼等の住む場所（アイル・ブREG名）・品級(jerge)¹⁶・名前などが記されている。後者は、旗内における正任の官員と閑散官員全員の品級や名前を記録した名簿冊である。

⑫タブナンが自分のアルバトへ品級授与を求めた文書と、それに対するザサグの命令文書。これは、タブナンが自分のアルバトに品級を与えるためにザサグ（旗衙門）との間でやり取りをした文書である。

論文の構成と結論

本論文は、以下のような六章から構成される。各章で明らかにした知見をまとめると次のようになる。

第一章「清代内モンゴル・ハラチン地域における王公タブナンとその管理様態」では、ハラチンの王公タブナンの管理様態を考察した。清朝の法制史料には、王公タイジの族毎に族長が設置されて、族内のあらゆる事務処理に当たっていたとしているが、族長の設置や彼らの具体的な任

¹⁶ jerge について、額定其勞氏は等級としているが、本稿で品級と呼ぶことにする。額定其勞 (2012) 「清代ハラチン・モンゴルの右翼旗における裁判」『東北アジア研究』16 号、167-204 頁。

務については定められていない。これはハラチンのタブナンも同様であったと思われるが、ハラチンの文書史料から見ると、族長にあたる者がダー・タブナン (da tabunang)、ダーマル・タブナン (dayamal tabunang 或いは damal tabunang)、ダー・ノヤン (da noyan)、ムクン・イ・ダー (mukūn i da、満洲語) 等と呼ばれている。本稿では族長タブナンと総称した。

本章では、まずハラチン左翼旗を事例にして、族長タブナンの設置はタブナンの血縁分枝に基づいていたことと、ザサグに近い分枝がより細かく分かれている傾向があったことを明らかにした。この事実は、先行研究によるハルハの場合とほぼ一致している。次に、王公タブナンの管理様態を考察し、それが族長タブナンによって管轄されていたことを明らかにした。族長タブナンの任務については、主に平時における任務と訴訟案件発生時における任務の二つに分けて考察した。平時における任務としては、主に旗衙門の命令で族内のタブナン系譜の作成・報告や、出家したタブナン・爵位を継承するタブナン・皇帝にアルバを提供するタブナンの報告など、また管轄下タブナンの犯罪行為の調査や報告などに責任を負っていたことが確認された。一方訴訟案件発生時の任務としては、事件に関わったタブナンに対する責任を持ちながら、旗衙門等による案件処理に協力していたことが明らかとなった。

第二章「清代内モンゴル・ハラチン地域のソムについて」では、ハラチン地域におけるソム組織の性格を考察するとともに、それが王公タブナンとどのような関係を持つのかを明らかにした。ソムは、清朝が自らの八旗制度に準えてモンゴル社会に導入した組織で、清代のモンゴル社会全体において存在したものである。本章での考察から見ると、少なくともハラチン地域のソムには、法制史料に明記された 150 名の箭丁だけでなく、タブナンの随丁や家奴や僧侶も含まれていたことが明らかである。また、随丁だけが王公タブナンと従属関係を持つのではなく、箭丁・家奴・僧侶達もタブナンとの従属関係を維持していたことが明らかである。従って、「每一百五十丁編一佐領」という法制史料中の規定は、ただソムにおける皇帝のアルバ負担者である箭丁数のみを定めたものに過ぎず、実はハラチンのソムは王公タブナンの各種アルバトから構成されていたのである。さらに、ソム毎における 150 名の箭丁は、基本として主人たる王公タブナンの血統関係によって各ソムに編入されていたことが検証された。

第三章「清代モンゴル社会における随丁分与問題について―内モンゴル・ハラチン中旗を事例として」では、ハラチンの貴族王公タブナンと非貴族身分の官員への随丁分与問題を考察した。清朝法制史料には、王公タブナンと管旗章京以下ソム章京以上の官員に分与する随丁の定額が定められている。しかし、法制史料上の規定からは、随丁分与の実態＝すなわち、タブナンや官員への随丁が、実際に旗内のどのような人々から、いつ、どのように分与されたのか、また官員への随丁分与とはいかなるものであったのかという問題は不明であり、従来この点については明らかにされていない。本章では、まずタブナンの随丁は彼らの所属アルバトで構成されたソムの官員によって、タブナン本人の所属アルバトの内から選ばれ分与されたことと、この作業は原則として比丁年に行われていたことを明らかにした。次に、管旗章京以下ソム章京以上の官員や、ハファンには、随丁或いは「随丁銭」が分与されていたことと、これをソム箭丁に負担させていた

ことを論証した。

第四章「ソムのアルバ報告冊から見た箭丁のアルバ負担」では、清朝法制史料中の「徴賦」規定を検討しながら、ソム箭丁の自分の所属王公タブナンに納めたアルバの実態を考察した。まず、「徴賦」規定は、最初から王公タブナンが自分の所属ソム箭丁から徴収するアルバを定めた規定であったことと、それがハラチン地域ではある程度実効性を持っていたことを明らかにした。そのあと、ソム箭丁の王公タブナンに対するアルバ＝私的アルバの内容とその変化、すなわち最初には家畜による現物や労役の形で供出されていたが、道光後半からは農地の面積に応じて銅銭で供出されるようになったことを明らかにした。アルバ供出形態のこのような変化は、ハラチン地域では少なくとも 19 世紀半ば頃から家畜よりも農業に依存するようになっていた事実と、貨幣経済の発展を背景としていたことを意味している。ここで、何よりも注目されるのは、王公タブナンとソム箭丁との統属関係が、実はソム箭丁の王公タブナンに対する負担アルバによって現れており、しかもこのような関係が清末に至るまで維持されていたことである。

第五章「内モンゴル・ハラチン地域における定住村落アイル・ブeregについて」では、ハラチン地域の定住村落であるアイル・ブeregの呼称やアイル・ブeregとソムの関係、及びアイル・ブeregの機能について考察した。ハラチン地域は内モンゴルの東南部に位置し、南は中国内地と隣接していたため、早い時期から漢人移民の入植が進んだ地域である。特に雍正期の「借地養民」政策の実施は、漢人移民の入植をさらに促したのである。その結果、ハラチン・モンゴル人の生活は次第に伝統的な遊牧生活から農耕生活へと変わり、定住村落が形成され、それが「アイル・ブereg」と呼ばれていた。本章では、定住村落アイル・ブereg住民と王公タブナンの属民集団であるソム構成員との間には一対一の対応関係がなかったことと、アイル・ブeregの治安維持や旗民の戸口・農地調査や旗内で自他を識別する帰順単位としての機能を明らかにした。

第六章「内モンゴル・ハラチン地域における官制について」では、ハラチン地域には法制史料に規定のある官員（正任の官員）と規定のない閑散官員が併存しながら機能していたことと、閑散官員の設置様態について考察した。まずハラチン中旗の事例から、同旗には法制史料による旗ソムの全ての官職が設置されていて、その内管旗章京以下の官員がほとんど非貴族身分の者であったことが解明された。次に、閑散官員という名称については、彼等は品級を持つが清朝による正任の官員ではなかったため、「閑散官員」として区別されていたことが論じられた。閑散官員の品級名称には、管旗章京品級 (jakiruyči-yin jerge)、梅倫品級 (meyiren jerge)、扎蘭品級 (jalan jerge)、章京品級 (janggin jerge)、驍騎校品級 (kündü-yin jerge) 等の職名と、各品級の護衛 (kiy-a)¹⁷及び七品級 (doluduyar jerge)、金頂子 (altan jingsetü) などが含まれていたが、扎蘭・章京・驍騎校の三つの品級を持つ者が著しく多かったことを明らかにした。続いて、閑散官員の任命は、多くの場合ザサグによって任命されるが、稀に盟長によって任命されていたことを明らかにした。最

¹⁷ ここで言う護衛 (kiy-a) は、清朝規定による王公府官員としての護衛ではなく、それ以外に設置された者と思われる。ハラチン左翼旗内で定められた規定 (200-006-2) によると、「ilegüü talbiysan kiy-a」とあり、これは定額以外に置かれた護衛が存在したことを意味する。とすれば、閑散官員として現れる護衛とは、定額の王公府官員である護衛以外に設置された可能性が高い。

後に、正任と閑散官員がともに旗衙門での駐班する任務、定住村落アイル・ブeregや治安維持組織である太平社の役人として管轄下の治安状況を調べ報告する任務及び、訴訟案件の調停、当事者・関係者の召喚や現場検証等の機能をしていたことを解明し、また正任の官員固有の任務としては、ソムのアルバ徴収や報告、比丁作業等が確認された。

以上の各章で明らかにした内容から一定の結論を出すとすれば、次のようなことが言えるだろう。清代のモンゴル社会は、清朝が導入したソム組織によって再編されたかのように見えるが、実際にはソムの設置によってモンゴル既存の社会関係が実質的に変わったわけではなかった。これは、本稿で明らかにしたハラチン地域におけるソムの性格や、ソムと王公タブナンとの関係によく裏付けられている。というのは、ソムは清朝が自らの八旗組織に準えてモンゴルに導入したものであったにもかかわらず、それがモンゴル既存の基本的社会関係である支配氏族と属下の間の統属関係を破壊したものでなく、逆にそれに基づいて設置されたからである。すなわち、ソムは任意の150名の箭丁の集まりではなく、王公タブナンの血統関係に基づいて、彼らの各種アルバト（箭丁、随丁、家奴、僧侶を含む）から構成された属民集団であり、王公タブナンとの間で明確な統属関係を持っていたのである。言い換えれば、これは清朝がモンゴル社会にソムを設置することによって、当該社会における既存の社会関係を変えようとしたわけではなかったことを意味している。従って、Sh.ナツァグドルジ氏によるソムと随丁が全く切断された二つの身分であり、ソムは閑散王公タイジの管轄から断たれた形になったという理解は再検討する必要があるだろう。

一方、本研究が対象とするハラチン地域には、ソム以外に、先行研究による支配氏族の血統分枝に基づいたオトグ・バグのような組織は存在しないことも注目される。岡洋樹氏は、オトグ・バグとソムを組織原理の異なる組織として、しかもハルハ・モンゴルでは両者が共存していたことから、これを清朝のモンゴル統治の重層性として指摘している¹⁸。しかし本稿で考察したハラチンの事例から明らかなように、オトグ・バグのような組織とソム組織は必ずしも共存するとは限らないこと、また両者は必ずしも組織原理を異にする組織とは限らないことが分かる。つまりハラチンの場合は、ソム組織自体が支配氏族である王公タブナンの血統分枝と属民関係に基づいて設置されているのである。言い換えれば、ハラチンの事例では、王公タブナンの属民支配と清朝によるソム制度が重なっており、両者の組織原理は一致しているとも言えるだろう。

このようなモンゴル支配氏族による属民支配と清朝による旗・ソムを通した行政支配を清朝のモンゴル統治の二重性とするならば、これは清朝の対モンゴル統治制度全体にも反映しているように思われる。すなわち、清朝がモンゴルに実施した統治制度が王公制度と旗・ソム制度からなっているのである。また、ハルハのようなオトグ・バグとソムが併存する場合のソムとハラチンのようなソムが、機能上どのように異なるのかという問題も検討されるべきであり、今後より多くの事例研究が必要となるだろう。

¹⁸ 岡洋樹前掲書 2007 : 271-276 頁。